

「5／8」や「7／8」ポジションはどっちに入った？

—自由で妙味のある奥深いルールの世界—

三二回生 近藤節夫

一、特異なユーティリティ・ポジション

高校生のころだったから、もう半世紀以上も前のことになるが、オーストラリア学生選抜チームが来日して、対戦した日本チームを「どごとく粉砕した。その時初めて「ファイブ・エイズ(five eighth)」と「セブン・エイズ(seven eighth)」という耳慣れないポジションがあることを知った。

端的に言えば、いずれも自由奔放に動き回り遊軍的な動きをする司令塔的ポジションと言えばよいかも知れない。今では見られなくなった七人制フオワードのチームにあってプレイしていたが、前者はひとり余った八人目のプレイヤーとして、中間のポジションであるハーフ・バックスの後ろに陣取り自由自在な役割を担っていた。また、後者の場合は、ファイブ・エイズならぬ遙か後方に位置して、遊軍的に二人フルバックの動きをしていた。その当時はあまり気にもせず、スタンド・オフやフルバックとはどう違うのだろうかと軽く考えた程度だった。今ならさしずめナンバー・エイトと呼ぶべきかも知れないが、フオワードではなく、完全にバックスの一員として俊足を活かし、グラウンド狭しと走り回っていた点で決定的に違っていた。

スペルを見れば明らかのように、「このファイブ・エイズとは分数の5／8であり、他方セブン・エイズは同じように7／8である。相手チームに対して前者が味方の5／8、後者が7／8のポジションでプレイすると定義付けられていたのではないか。その時以来ラグビーのルールとフッガーマンのポジションについて、考えるともなく考えることがあった。

二、帝国主義時代の名残り

今更説明するまでもないが、ラグビーは他のスポーツと違って、「ことさら「伝統」「紳士」「友情」「ノーサイド」など格調高い言葉が象徴するように、他のスポーツに比較して自主性を重んじる、極めて信義に満ちた紳士的なスポーツである。それはともすれば唯我独尊に陥り、明らかに帝国主義の本家だった、一九世紀イギリス社会の縮図と錯覚されるほど保守的な体質を表に出した。ラグビーの起源と発展の裏には、ラグビー自体が持つ紳士同士のエンゲージメントや決め事のプリンシプルが内包されていたからである。それこそが評価に値するラグビーの魅力であり、奥義のようなものでもあるが、一方でその頑なな精神性のゆえに誤解を生み、狭いコミュニティではあるが貴族社会が庶民との間に作った垣根を長

く支え、保守的で非民主的な一面に不本意ながらも手を貸す一因となったことも事実である。

かつては長きに亘って、わが国ラグビー界も願ってか願わずしてか、このイギリス流プリンシプルを堅持して、保守的な体質を持ち続けていたことはよく知られている。

長い歴史を誇る関東大学ラグビーを取上げてみても、伝統校・早慶明を中心とする旧勢力が長きに亘り君臨し、それが歴史と伝統を築いたと言えば聞かえはいいが、気の合う相手としか試合を組まなかった、かつての対抗戦なるものは、明らかにイギリス上流社会のサロンのなクラブ組織に合い通じるものであり、そこには同根の発想と体質があった。辛辣に言えば排除のロジックであったと言っても言い過ぎではない。伝統校が後生大事に護ってきたコミュニティ、いわゆるサロンの互助組合組織は、かつての帝国資本主義時代の保守的レジームを髣髴させるような一種の村八分的色彩すら帯びていた。

植民地新興チームに対して宗主国チームの間に築き上げられたヒエラルキーは微動だにせず、彼ら新興チームを仲間に加えないまま、最近まで「伝統」というきれいなことを引き継ぎ維持することによって体制は維持されてきた。それが時代のスポットを浴び、仲間内のシステムの縄張りが、喧々諤々の論争の末に紆余曲折を経て、今日の対抗戦とリーグ戦に分かれて覇権を争う民主的なシステムに移行してからまだそれほど日は経っていない。そして、上流社会により真綿にくるまれるように庇護されてきたラグビー界も、遅過ぎる開国期を迎え、激動する世の荒波に晒される時代環境になった。雲の上にあらっちゃった「ラグビ―殿下」も「降臨される世になったのである」。

三、アドバンテージ・ルールと絶対服従

ラグビーはルールに厳格な騎士道の国で生まれたスポーツであり、ラグビーならではの言い尽くせない魅力とメリットがある。厳格さだけではなく、そこには筋が一本通った「ルール厳守」が厳然とあり、それに加えて、真の自由と民主的な背骨が備わっているのである。対戦チームとの「民主的」な話し合いの余地とか、ルールに「自由」なフレキシビリティがあるという革新的な自主性が、話し合いの機会を醸成し、「キャプテンシー」というリーダーシップを具現する言葉とともに共存している。「解放」とか「自由自在」と相俟って、ゲームの間に相手の反則があっても味方に有利とみれば、興味を殺がないためにそのままプレイを続行させて次のプレイ中に味方に不利と分かった時点で、ひとつ前のプレイを味方有利の状況に戻してゲームを再開する「アドバンテージ・ルール」の如きは、まさにミスを見逃さず公平に監視する正義の理念を具現したもので、実に奥が深い。アドバンテージ・ルールこそ「考えるスポーツ」「知のスポーツ」「公平なスポーツ」であるラグビーの真骨頂だと納得させられる。

他のスポーツが厳しく細かいルールの下にプレイしながらも、アピールが認められているのとは異なり、ラグビーではいくつかの自由裁量を許容しながらも、一旦決めたルールに従

いレフェリーへのアピールは一切認めていない。レフェリーのジャッジメントに関して絶対服従なのである。決めたことは断固遵守するという騎士道の決意の表明であろうか。そして、ゲームセットとなるや、敵と味方が一緒に互いの健闘をリスペクトするノーサイドという美しいスポーツマンシップの発露も、他のスポーツにはあまり見られない美しい光景で、これまたラグビーが他のスポーツの追隨を許さない点である。これこそ今に誇れるイギリス紳士の伝統であり名残りであろう。

四、ラグビーは紳士のスポーツか？

イギリスでは今日でも「サッカーは労働者のスポーツ、ラグビーは紳士のスポーツ」と時には意図的に誤解されかねないような語られ方で、大衆スポーツであるサッカーとは一線を画し、貴族社会、或いは上流社会の中で、彼らのしきたりや生活習慣に見合った知的スポーツのひとつとして研磨され、より体裁を整えて完成され発展してきた。

今から三〇年ばかり前に筆者はラグビー発祥校・ラグビースクールを訪問し、そのタペのファンクションでラグビー関係者のラグビーに対する並外れた愛情と熱意、プライドに圧倒されたことがある。ただラグビーをプレイしたことがあるとの一事だけで、同行したグループのリーダーを差し置いて主賓に祭り上げられてしまった。ラグビーをプレイすれば気持ちは同じというラグビー関係者の熱い言葉には感動をすら覚えた。実際今日までひとときラグビーをプレイしたおかげで得たものは計り知れず、失ったものはひとつもない。彼らはイギリスで大衆スポーツとして人気のサッカーなんか歯牙にもかけず、ラグビーこそ男の中のスポーツと意気盛んだった。今でもラグビーをプレイすることが、イギリス人にとつては勲章であり、プライドであり、大きな喜びでもあるのである。

しかし、ひとくちに「自由」「平等」を唱える風潮の中で、ラグビーを世界のスポーツにしようとの声は、意外にもサロンのな体質のラグビー界では、長らく育まれることはなかった。裾広い人気のサッカーが隆盛期を迎えた今日では、むしろラグビーに内在する、保守的で非世俗的な要因がラグビーのグローバルな普及の足を引っ張っていたことも事実である。

その一方で、イギリス社会の植民地であったオーストラリアやニュージールランドで、自由奔放にプレイをしたラグーマンが宗主国に対して力を見せつけるに及んで、本家のイギリス・ラグビー界は時代の趨勢とラグビーファンの本音に漸く気がつき始めたのである。血湧き肉踊る、男のスポーツという本質論は別にして、国内のスポーツ改革派からは門戸を開かないサロン・スポーツと揶揄され敬遠されていたラグビーが、一大転換を図り、普く大衆の声に耳を傾け、お高く留まっていた貴族社会から労働者階級のレベルまで天下ってきたのである。ラグビーが本当の意味で大衆的なスポーツとなるまでには、まだ若干時間を要すると考えられるが、ともかくグローバル化へ向けてスタートしたのである。

幸い七人制とは言え、二〇一六年夏季オリンピックの正式種目に推薦されたことは、ラグビーに対する過去の一部の偏見が、ある面を取り除かれ、多くの人びとがラグビーの普

及と発展を願っているからにはかならない。ラグビーファンのひとりとしても、この動きを少しでも後押ししたいものである。

五、ラグビー・ルールの特異性

ラグビーの特異性は、前記した「アドバンテージ・ルール」にそのユニークさが見られるが、ほかにもチームによつては珍しいオンリーワン・エンゲージメントを発揮している。今でこそ国際試合や大学生以上のゲームでは、四〇分ハーフが原則となったが、かつては当事者同士の話し合いで三五分ハーフか、四〇分ハーフ制を選択したものである。フォワードにしても今や八人でスクラムを組むのが当たり前になったが、以前はそれも七人制か、八人制のどちらを選んでも良かった。わが国ラグビーのルーツ校である慶應義塾のときは、かつては三五分制を選択し、七人でスクラムを組んでいた。その他にも長い間一三番の背番号を欠番として、右ウイングが一五番の背番号、フルバックが一六番を付ける異色チームだった。

それが時代や世相の変遷とともに個性や独自性が払拭され、今では各チームとも統一ルールの下にゲームが行われ、ラグビー発祥のころの理念や精神、チームとしての独自性が少しずつ消えつつあるのは、ある面で寂しい気がしている。

ヤード法の撤廃とメートル法の採用により、ルールが変更の憂き目を見たこともある。グラウンドは、両ゴール・ライン間の距離がグラウンドによつてまちまちだった。そもそも一〇三ラインと二二三ラインの基点が別々なのである。ハーフウェイ・ラインから一〇三の距離に敷かれたのが一〇三ライン（正確な距離は異なるが、かつての一〇ヤードライン）であるのに対して、二二三ライン（かつての二五ヤードライン）はゴール・ラインからの距離を表わしている。その理由は、一〇三ラインと二二三ラインの間が決められておらず、スペースさえあれば、自由に設定することができるところである。この点は、イン・ゴールと呼ばれるエリアであるデッドボール・ラインとゴール・ライン間の距離も決められていないことから、その特異性と自由奔放さが偲ばれるというものである。

六、ポジションのいわれ

数々あるラグビーの個性的な特徴に、冒頭に紹介した選手のポジションの呼称がある。ポジションはグラウンドを八等分した分数に敷衍して呼ばれる。味方が攻撃する際のフォーメーションは、前のフォワードと後のバックスに分かれる。そのフォワードの最前線は、1/8の第一列（フロント・ロウ）であり、これはフッカーとプロップと呼ばれる。その後ろで支える大柄選手が2/8の第二列（セカンド・ロウ）でありロックと呼ばれる。その後ろの3/8の第三列（サード・ロウ、またはバック・ロウ）がディフェンスとアタックを展開するフランカー二人とナンバーエイトから編成されている。こうしてフォワードが1/8から3/8のポジションを占める。

フォーメーションの真ん中でキーマンとしてプレイするのが、ハーフ・バックスと呼ばれるスクラム・ハーフとスタンド・オフである。二人は自陣の中間、つまり4/8の位置にいる。そして、八番目の選手が遊軍でハーフ・バックスとインサイドセンター、或いは第一センターとの繋ぎ役としてプレイする場合は、ファイブ・エイスとして5/8のポジションを占める。また、下がってスリー・クォーターズ・バックス(three quarters backs、3/4=6/8)とフルバックの間でプレイする場合は、セブン・エイス(7/8)と言われていた。バックスの得点源は、センターとウィングから成るスリー・クォーターズ・バックスであるが、最後部で全体を眺めながら状況を判断し、味方に的確な指示を出し自在に動き回るのはフルバック(8/8)である。そのフルバック以上に自由に攻撃・防御面に参加して存在感を発揮していたのがセブン・エイスだ。こうして見ると、イギリス伝統の四分割(八分割)方式によってグラウンド上すべてのポジションに選手が満遍なく配置されていることが分かる。

1	／	8	フロント・ロウ
2	／	8	セカンド・ロウ
3	／	8	バック・ロウ
4	／	8	ハーフ・バックス
5	／	8	ファイブ・エイス
6	／	8	スリー・クォーター
7	／	8	セブン・エイス
8	／	8	フル・バック

七、オリンピック正式種目となる七人制ラグビー

二〇〇九年八月開催の国際オリンピック委員会(IOC)理事会で、七人制ラグビーが圧倒的な支持を得てオリンピックの正式種目に推薦された。アメリカ大陸やアジアで人気の高い野球やソフトボールをおしのけて堂々たる推挙である。歴史的にヨーロッパ人と繋がりが強いIOCとは言え、いかにラグビーが世界中の人びとから好まれているかという証左である。世界的な普及という観点で大いに歓迎すべきであり、これまで話し合い精神が生かされていた高度なプリンスプルと、サロンの融和のスピリットを今後さらに世界へ向かって訴え、広く啓蒙することを願っている。

過去において閉塞社会のマイナス面はあったにせよ、世界においてラグビーの普及という「大の虫」を生かそうと思えば、ラグビー界だけにしか容認されない「小の虫」は殺さざるを得ないということは至極当然である。今や公式試合のルールは国際ラグビー・ボードの下に統一され、確立された。同じルールの下でラグビーは行われ、IOCのお墨付きを得てこれからも世界各地に素晴らしいラグーマン・スピリットを発揮したゲームが展開されることであらう。

七人制ラグビーは、一五人制ラグビーに比べて、力と力の対決であるスクラムのぶつかり合いが見られず、迫力の点でやや物足りなさを感じるが、その分短い試合時間の中で終始スピーディな展開によって、その欠点を補ってくれるものと期待している。少なくともゲーム中の「アドバンテージ・ルール」や「レフリーへ絶対服従」というラグビー独特の決め事と、相手を敬う「ノーサイド」精神は、これからも生き続けるだろう。ひとりのラグビーファンとして、「知的スポーツ」としてのラグビーの原点だけは見失わず、ラグビーの奥深さを考えながらゲームの展開を楽しみ、その余韻に浸りたいものだと思うている。

ラグビー 万歳！